

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

July 2023 vol.37



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「建築家・内藤廣／BuiltとUnbuilt 赤鬼と青鬼の果てしなき戦い」

建築のたのしみ—五感と想像力で空間を味わう

石見特別版 企画展「永田コレクションの全貌公開(一章) 北斎—『春朗期』・『宗理期』編」

知られざる若き日の北斎を、石見で

随想 展覧会よもやま話

実にならなかつたお話—夕暮時の墓参

37



《Unbuilt／アルゲリッチハウス(模型)》 2012年

「建築家・内藤廣／BuiltとUnbuilt 赤鬼と青鬼の果てしなき戦い」

2023年9月16日(土)～12月4日(月)

休館日:毎週火曜日 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)



A



B

A. 十日町情報館 写真提供:内藤廣建築設計事務所

B. 日向市駅 写真提供:内藤廣建築設計事務所

建築のたのしみ—五感と想像力で空間を味わう

建築家・内藤廣の文章に、次のような一節がある。「建築という価値は、それを形作る壁や屋根といった物質と、その物質に取り囲まれた空間とに二分できる。(中略)建築の根源的な価値や力は空間にある、と思っている。眼差しによってすぐに消費されてしまう形とは対照的に、空間の価値は消費されにくい。その場所を実際に体験してみなければ分からない。そこに身を置いて、時を過ごしてみなければ分からない。時とともに移りゆく空気質感を感じとらねばならない。」(「不完全さと想像力」建築的思考のゆくえい2004年、王国社)

内藤の建築をいくつか巡ってみるとこの文章が腑に落ちる。駅、店舗、文化施設など用途も立地も様々な建物を訪れた際に共通するのは、「ぼんやり過ごす」時間があることだ。私は建築の専門家ではないので、「形」を分析することはない。また、内藤の建築にはキャッチーなデザインというもの、あまりない。それでも、しばし留まって場の空気を味わいたくなる不思議な力を持っている。

例えば、新潟県の十日町情報館。数メートルにもなる積雪に耐える屋根を持つ、質実剛健な外観の図書館である。中に入ると、開架スペースは天井が高く広々したフロアで、スロープと階段でつながれた書架が段状に連なっている(図A)。「見渡す限り

の本」という、本好きにとっては至福の空間だ。一番低い層に座ってその光景を眺めていると、書架に沿って閲覧机があり、読書や自習をしている人たちがいるのに気付いた。自分も座ってみたいと思い、本を一冊選んで空席の一つに収まった。眼下には本の海、見上げると天井にコンクリートの梁が整然と並ぶ。私は十日町の豪雪を経験したことはないが、雪深い時期にこの屋根に守られ、無数の本に囲まれて読書に耽る時間を想像し、憧れた。

宮崎県の日向市駅(図B)では、列車からホームに降り立った瞬間、杉の香りが漂ってきた。建てられて10年も経つのに驚いて天井を仰ぐと、波のように連なる杉板の梁に圧倒され、上を向いたまましばしホームを歩き回ることになった。

さてこの秋、当館では内藤廣の個展を開催する。当然ながら建築そのものを運んで来られるわけはなく、模型や図面の展示となる。それでは建築の形状は把握できても、空間を味わうことはできない。気に入った作品があれば現地を訪れてください……としか言えないのが、建築展が抱える悩みである。

しかし今回の展覧会で多数紹介する「Unbuilt」(アンビルト)、つまり設計はしたが実際には建てられていない作品群は、そもそ

もこの世に存在しないため、空間を体験することは誰にもできない。どんな建築を目指したのかは、会場に設置する内藤本人の解説を頼りに想像するしかない。そこでは彼の内面に居る「赤鬼」(情熱の象徴)と、「青鬼」(理性の象徴)との対話によって、設計中の苦労や葛藤が語られる。彼が何を指し、どう考えて設計したか、そこにどんな障害があり、どう乗り越えたかという、通常はアーティストが秘匿したがる過程が開陳されるのだ。

この思い切った展示には、後進の建築家だけでなく全ての人に(この世に建築と無縁でいられる人はいない)、「よい建物、よい空間とは何か？」を考えてほしいという内藤の願いが込められているように思う。

そうはいっても、見たことがない建物を図面と言葉で想像するのは難しい!という方には、当館、「グラントワ」の紹介コーナーから見ることをお勧めする。出品作品で唯一、その場で実際の空間を体験できるものだからだ。会期中はロビーや中庭など館内各所に、普段はない解説パネルが出現する。グラントワの成り立ちを知れば他の建物についても想像がしやすくなるだろう。普段あまり使うことがない「空間への想像力」のトレーニングに、ぜひ挑戦してほしい。

(川西由里 当館専門学芸員)

「永田コレクションの全貌公開〈一章〉 北斎—『春朗期』・『宗理期』編」

2023年12月23日(土)～2024年2月12日(月・振休)

休館日: 毎週火曜日、年末年始(12月28日～1月1日) 開館時間: 9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

石見特別版
企画
画展



図1



図2



永田生慈氏(1951-2018)

図1.《鍾馗図》 島根県立美術館蔵
(永田コレクション)

図2.《婦女風俗図》 島根県立美術館蔵
(永田コレクション)

知られざる若き日の北斎を、石見で

「これまで多くの北斎展を観てきたが、今回の様な内容のものは初めて」「北斎=富嶽三十六景というイメージが覆された」「新鮮な驚きと発見がある北斎展」—これらは、今年2月から3月に島根県立美術館で開催された「永田コレクションの全貌公開〈一章〉 北斎—『春朗期』・『宗理期』編」でのアンケートに書かれた感想である。こうした感想は、おそらく誰より、本展出品作の全てを島根県へ寄贈された、故・永田生慈氏(1951-2018)が願っていたことであろう。

島根県津和野町出身の永田氏が北斎研究を志したのは10代半ばのこと。多くの論文や書籍を執筆し、国内外で北斎展を監修するなど、66歳で病没するまで、北斎の研究と顕彰に情熱を傾けた。そんな氏の念願は、北斎の真の姿—多様な分野・表現に挑み、終生自己を変革し続けた70年に及ぶ全画業—を解明することであった。

だがその一方、北斎の実像と世間で抱かれている北斎のイメージが乖離していることを痛感したという。ある北斎展で、多くの観覧者が《富嶽三十六景》以外の作品を初めて観るかのような様子を目の当たりにし、「いまだ北斎への一般的な認識はこの程度だったのか、と(中略)ギャップの大きさに思わず嘆息した」(『葛飾北斎』(2000年・吉川

弘文館)より)。

こうした経験もあってか、氏には一つの信念があった。それが「一部の風景版画や『北斎漫画』のみを偏重評価するこれまでのとらえ方では、十全な北斎理解は得られるはずはない」(『葛飾北斎 生涯と作品』(2005年・東京美術)より)というものだ。この信念は氏の研究や展覧、そして蒐集活動に通底している。

氏は自身の研究のため、北斎に関する作品や資料を蒐集した。それが総数2,398件から成る「永田コレクション」である。その特徴は、全6期に大別される北斎の人生を通覧できる点で、特筆すべきは、北斎の画業最初期にあたる「春朗期」(20～35歳頃)の充実ぶりである。当該期の残存作品数は他期に比べて著しく少ないが、氏は91件もの作品を蒐集。それも北斎(春朗)が手がけた版画の各分野(錦絵・摺物・版本)に加え、極めて寡作な肉筆画をも含む。この時期の肉筆の完成品は世界でわずかに2点(図1)と(図2)しか確認されておらず、その2点共が「永田コレクション」に収められている。

かつて春朗期は北斎の習作の時代として等閑視された。しかし氏の地道な作品博搜と研究により、驚くほど多彩な作品が描かれ、後の作画活動との繋がりが深い

重要な時期であることが解明された。この春朗期の充実ぶりこそ、特定の年代、分野、画題に偏ることなく、北斎が歩んだ画家としての人生全体を遍く理解する—そんな「十全な北斎理解」を希求した永田氏の信念を端的に示している。

個人が集成した北斎に関する作品群としては「世界最大級」と評されるこのコレクションは、2017年、島根県へ寄贈された。その際の条件が、展示公開は島根の二つの県立美術館に限定する、というもの。北斎の知られざる側面を伝えるこの貴重な作品群は、島根県でしか鑑賞することができない県外不出のコレクションとなった。

島根県はこのコレクションの全貌を、全四回(四章)の展覧会を通じて公開する。冒頭で挙げた北斎展はその〈一章〉で、12月には、「石見特別版」を冠した同名展を島根県立石見美術館で開催する。一般的に北斎に抱かれてきた“風景画家”・“奇人”・“天才”といったイメージとは異なる北斎の姿を、ぜひその目で確認いただきたい。自身が生まれ育った石見の地で多くの方に北斎の実像に触れていただくこと—それは永田氏の本望であるにちがいないのだから。

(島根県立美術館 専門学芸員 大森拓土)

実にならなかつたお話—夕暮時の墓参

企画展を開催するまでに、準備期間というものがある。企画展とひとくちに言っても様々な形があり全て同一ではないが、準備に要する期間はおよそ2年から3年。長い時は5年の歳月がかかる場合もある。ここでお話するのは、その準備段階に遭遇した、結果だけ見れば「実にならなかつたお話」である。展覧会は、展示可能なものが現存することが前提であり、準備段階に調べた多くの事柄が成立しなかったり、機が熟さなかったり、何らかの事情で不出品となることが多々ある。今回は途中行き詰まったため、未消化なままで終わったお話を少し古い記憶ではあるが書いてみたい。

今から7年前、2016年7月から9月にかけて、当館で「原田直次郎 西洋画は益々奨励すべし」という企画展を開催した。森鷗外がドイツ留学中に知り合い、生涯の友となった洋画家、原田直次郎(1863-99)の生涯と画業に焦点をあてた展覧会である。企画立案者である埼玉県立近代美術館を最初の会場として、神奈川県立近代美術館葉山館、岡山県立美術館、そして

島根県立石見美術館と4つの地域の美術館を巡回する形で構成された。原田は日本近代洋画史において、突出した実力をもつ画家で、ドイツ職人の姿を迫力溢れるタッチで描いた《靴屋の親爺》や、鷗外も関わった歴史画論争の発端となった大作《騎龍観音》の2点は、美術史上優れた名品として重要文化財に指定されている。しかし36歳の若さで早世し、作品の現存数が50点に満たないなど、単独の回顧展の開催の前に多くの課題があった。そこで4つの館で時代を分けて調査研究を分担しながら、準備をスタートした。

展覧会は、最初に趣旨を立ち上げ、次に内容構成の骨子を決め、それに沿った出品リスト作りから始める。そのため現存する作品や資料を調査し、作品に描かれた対象、影響面、様々な人間関係など、多方面から想定できることを推理し、文献や物をあたっていく。国粹主義に偏重した時代。西洋画の取得が困難ななか、原田の画塾・鍾美館には多くの塾生たちが集まった。ここから伊藤快彦、和田英作、三宅克己、大下藤次郎らが輩出し、次代を担う画家に成長していく。しかし塾には画家として大成した者ばかりではなく、記録に名前を残さず生涯を終えた者も多くいたはずである。鍾美館にはどういう人物が通ったのか、彼らの絵がどこに残っていないか。原田

の没後10年、鷗外中心に記念会が発足し刊行した『原田先生記念帖』には、弟子や友人らの寄せた文章が載る。その文中に塾生の名前が出てくるのだが、それが唯一の手がかりであった。なかでも私が興味をひかれたのが二人の女性、石田裕子と平井時子の存在である。彼女らは開校当初(明治22年)から在籍し、このうち石田裕子に関してのみ、この人ではないかという人物に辿り着いた。坂本龍馬と同郷の幕末の志士で、維新後は新政府に仕え男爵となった石田英吉の一人娘で、のちに人類学者の石田英一郎の母となる女性である。彼らの文献に裕子の足跡がないか調べ、調査の途中、京都のお寺に石田家のお墓を探して訪ねたりしたが、鍾美館との関連について明確な記録は得られず、作品も発見できなかった。ただひとつ。裕子の夫となった奈良八弥が、鍾美館開校の年にドイツのフライベルグ鉱山大学に留学していることから、婚約者の留学先の文化を少しでも理解しようと、鍾美館に通ったのかもしれない。結局他の塾生たちの消息や作品も見つからず定められた期限がきて、この疑問ごと「お蔵入り」となったが、7年経った今もささったトゲの様に疑問が頭をよぎる。時折、夕暮れ時の寺の広い境内、お墓を探してまわった日を思い出すのである。

(左近充直美 当館専門学芸員)



A. 原田直次郎展ポスター



B. ギャラリートークの様子



C. 展示会場の様子